

学生の音楽能力の実態と嗜好について

A Study of the Musical Abilities & Preferences of College Students

依 藤 里 子

1 はじめに

音楽教育において音楽能力・聴能を把握することは重要なことである。聴能は、幼児期に芽ばえ著しい発達をする。この聴能がどのように育つものであるか。本稿では、学生の現在の音楽能力・聴能と音楽の感性を把握するために調査を行った。

音楽的能力を測定するためには、多くの音楽テストがある。音楽テストには、基礎的音楽能力を測定する適性テストと音楽的学力テストとがある。前者の適性テストは、将来の音楽的能力を測定する場合、後者の学力テストは、現在の音楽的能力を測定する場合に用いられる。

ウイング音楽適性テストは、「英国のウイングにより1948年に作成されたもので、7項目のテストよりなる。各バッテリーの信頼性は、93前後で非常に高い。尺度は、各年齢5段階に分かれ、8歳から17歳まであり、⁽¹⁾」目的は、学生の将来の音楽能力・聴能と感性を測定しようとしたものである。このことから、「ウイング音楽テスト」⁽²⁾を基に簡略化し、将来の音楽的能力を把握するのではなく、音楽教育の必要上現在の学生の音楽能力を測定しようとして試みた。又、音楽の嗜好についての調査も行った。以下、調査結果を提示しながら、学生の音楽能力の実態と嗜好について検討してゆきたい。

2 調査方法

調査Ⅰ 変化音の判別

被験者の聴能の正確さと記憶を測るものとして、旋律を二度繰り返して聞かせ、何番目の音が増加しているか、変化音の場所の判別を行った。反復の旋律については、三音より始め、七音まで増加し、音程については、二度で進行し、一ヶ所三度又は四度を使用した。

調査Ⅱ 和音の数の判別

和音の構成音は、単音から四音までとし、それぞれ構成している音の数を判別した。

調査Ⅲ 二和音間の変化状態の判別

二つの和音を与え、後者が上昇・下降・同一のいずれであるかを判別させる。

調査Ⅳ 拍子の判断

学生の音楽能力の実態と嗜好について

被験者の音楽的感性を測るものとして、八小節の旋律を二度与え、それぞれの拍子のアクセントの位置を変えて奏し、適否を判断する。

調査V フレージングの判断

八小節の旋律をフレージングを変えて二度与え、適否を判断する。

調査VI 和声の判断

八小節の四声密集型を二度通奏し、和声進行上の適否を耳で判断させる。

調査VII 強弱の判断

旋律を二度通奏し、それぞれの表現（発想記号）を変化して与え、適否を判断する。

調査VIII 音楽の嗜好

音楽の好き嫌いを五段階に分けてたずねた。さらに、音楽の好みについてもジャンル別に回答させた。

3 被験者および調査期間

相愛女子短期大学学生649名に、昭和63年7月11日～16日の間、上記調査を実施した。

4 結果と考察

表I～表VIIIに調査結果を示す。

表I 変化音の判別

		テストI	テストII	テストIII	テストIV	テストV	テストVI	延べ人数 %
正	人数	593名	561名	273名	498名	518名	484名	2927名
	%	91.37%	86.44%	42.06%	76.73%	79.81%	74.57%	75.16%
誤	人数	55名	86名	374名	148名	129名	163名	955名
	%	8.47%	13.25%	57.62%	22.80%	19.87%	25.11%	24.52%
無回答	人数	1名	2名	2名	3名	2名	2名	12名
	%	0.15%	0.30%	0.30%	0.46%	0.30%	0.30%	0.30%

表II 和音の数の判別

		テストI	テストII	テストIII	テストIV	テストV	テストVI	延べ人数 %
正	人数	627名	518名	640名	584名	386名	352名	3107名
	%	96.61%	79.81%	98.61%	89.98%	59.47%	54.23%	79.78%

学生の音楽能力の実態と嗜好について

誤	人数	21名	130名	8名	64名	262名	296名	781名
	%	3.23%	20.03%	1.23%	9.86%	40.36%	45.60%	20.05%
無回答	人数	1名	1名	1名	1名	1名	1名	6名
	%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%

表Ⅲ 二和音間の変化状態の判別

		テストⅠ	テストⅡ	テストⅢ	延べ人数
					%
正	人数	541名	485名	460名	1486名
	%	83.35%	74.73%	70.87%	76.32%
誤	人数	107名	163名	188名	458名
	%	16.48%	25.11%	28.96%	23.52%
無回答	人数	1名	1名	1名	3名
	%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%

表Ⅳ 拍子の判断

		テストⅠ	テストⅡ	延べ人数	
					%
正	人数	315名	448名	763名	
	%	48.53%	69.02%	58.78%	
誤	人数	329名	197名	526名	
	%	50.69%	30.35%	40.52%	
無回答	人数	5名	4名	9名	
	%	0.77%	0.61%	0.69%	

表Ⅴ フレージングの判断

		テストⅠ	テストⅡ	延べ人数	
					%
正	人数	159名	281名	440名	
	%	24.49%	43.29%	33.89%	
誤	人数	486名	364名	850名	
	%	74.88%	56.08%	65.48%	

学生の音楽能力の実態と嗜好について

無回答	人数	4名	4名	8名
	%	0.61%	0.61%	0.61%

表Ⅵ 和声の判断

		テストⅠ	テストⅡ	テストⅢ	テストⅣ	延べ人数
						%
正	人数	541名	485名	460名	116名	1602名
	%	83.35%	74.73%	70.87%	17.87%	61.71%
誤	人数	107名	163名	188名	530名	988名
	%	16.48%	25.11%	28.96%	81.66%	38.05%
無回答	人数	1名	1名	1名	3名	6名
	%	0.15%	0.15%	0.15%	0.46%	0.23%

表Ⅶ 強弱の判断

		テストⅠ	総人数
		%	
正	人数	463名	463名
	%	71.34%	71.34%
誤	人数	184名	184名
	%	28.35%	28.35%
無回答	人数	2名	2名
	%	0.30%	0.30%

表Ⅷ 音楽の嗜好

	大好き	好き	どちらでもない	嫌い	大嫌い	無回答	総人数
							%
人数	197名	313名	73名	35名	27名	4名	649名
%	30.35%	48.22%	11.24%	5.39%	4.16%	0.61%	100%

旋律の記憶は、音の数よりも音程・配列により異なることが表Ⅰより窺える。テストⅠ・Ⅱは、いずれも三音であるが、前者はすべて二度で進行し、後者は一ヶ所三度の跳躍を含むため、約5%低い数値となった。次に、テストⅢ・Ⅳは、音の数がそれぞれ四音・五音と増加し

ている。しかし、前者は四音であっても三度の跳躍が連続しているの、後者の五音の一ヶ所四度の跳躍を含む順次進行より、約35%も下まわる数値となった。テストV・VIは、音の数が増加するだけで、いずれも同一の形（四度の跳躍+順次進行）をとっているの、目立った数値の動きは見られない。

変化音の場所については、旋律の記憶と同じく、音程により把握出来る数値に著しい変化が見られる。跳躍の場合、約42%、順次進行の場合、音の数が三音で約86%~91%、五音~七音で約75%~80%という結果となった（表I）。

和音の数の判別については、耳慣れた単音・オクターブ・三和音については、判別が出来るが、重音・四和音については、ほとんどの学生が把握出来ない。テストI・IIIの単音で約97%~99%、テストIVのオクターブで約90%、テストIIの三和音で約80%の学生が判別出来る。しかし、テストVの四和音・テストVIの重音については、約59%・54%と下まわっている（表II）。

次に、二和音間の変化状態の判別についてであるが、単音・三和音の違いは見られず、三和音は一つの響きとして聞き取られ、構成音の把握は出来ている（表III・表IIのテストII）。テストIは、二つの三和音をオクターブ以上離し、後者を下降させ和音も変えた。テストIIは、二つの和音間をオクターブ以内とし、後者を上昇させ和音も変えた。テストIIIは、構成音が出来ただけ共通している音で和音を変化させた。結果は、約83%・75%・71%となった（表III）。

拍子の判断については、揺れ動く軟らかさのある複合拍子においては正しく把握され、基本となる単純拍子が低い結果となった。テストIは単純拍子、テストIIは複合拍子とし、それぞれ八小節の旋律を二度拍子のアクセントを変えて与えた（表IV）。

フレージングは、楽器（ピアノ）の影響と認識不足が手伝って低い数値となった。テストI・IIの内容は、拍子のアクセントの調査と同様である。次回には弦楽器で奏し、フレージングの重要性を認識した上で調査に臨みたい（表V）。

和声の判断は、中・高音域の四声密集形は比較的判断出来るが、低音域の響きはほとんど判断出来ない。テストI・IIは四小節の旋律に簡単なハーモニーを付け、テストIIIは八小節の旋律で内容はテストI・IIに準じた。テストIVは主旋律を低音部に置き、その上にハーモニーを付けた。テストI・IIは主要三和音を中心に動いているので判断も容易で、テストIは約83%と高い数値となった。しかし、テストIIは主要三和音以外も多く使用した為、テストIより約8%下まわった。テストIIIは、小節数が増加した為、さらに4%下まわった。テストIVは、聞き慣れていない事もあって、テストIIIより約53%も著しく低下した（表VI）。

強弱の判断は、今回はピアノで八小節の旋律を二回表現を変えて通奏した。結果は、約71%となった（表VII）。今後、歌詞をつけて歌唱した場合、事前に楽譜を与えた場合等の調査を行い、比較検討してゆきたい。

音楽の嗜好については、おおむね音楽を好む傾向にあることが窺える。「大好き」・「好き」

学生の音楽能力の実態と嗜好について

を合わせると約79%、「嫌い」・「大嫌い」を合わせると約10%、「どちらでもない」が約11%となった。好む音楽の傾向は、ニューミュージック・歌謡曲・映画音楽・コマーシャルソング・ロック・ディスコミュージックであることがわかる。これは、昭和62年に調査した結果（『相愛女子短期大学研究論集』第35巻）とほとんど変化していない。表Ⅸ～Ⅹに調査結果を示す。

表Ⅸ 音楽の嗜好

昭和62年 (573名)	人数	555名		0名	18名		0名
	%	96.85%		0%	3.14%		0%
	人数	304名	251名	0名	18名	0名	0名
	%	53.05%	43.80%	0%	3.14%	0%	0%
		大好き	好き	どちらでもない	嫌い	大嫌い	無回答
昭和63年 (649名)	人数	197名	313名	73名	35名	27名	4名
	%	30.35%	48.22%	11.24%	5.39%	4.16%	0.61%
	人数	510名		73名	62名		4名
	%	78.58%		11.24%	9.55%		0.61%

表Ⅹ 音楽の好み

		ニューミュージック	歌謡曲	映画音楽	コマーシャルソング	ロック	ディスコミュージック	フォークソング
昭和62年 (573名)	人数	448名	446名	351名	281名	280名	245名	119名
	%	78.18%	77.83%	61.25%	49.04%	48.86%	42.75%	20.76%
昭和63年 (649名)	人数	488名	470名	0名	0名	307名	264名	124名
	%	75.19%	72.41%	0%	0%	47.30%	40.67%	19.10%

学生の多くが音楽に興味を示しているが、音楽能力の成長が見られない為、安易な大衆音楽に親しんでいることが窺える。これは逆に個人の音楽能力を知りその範囲の中で楽しんでいるともいえる。単に優れた聴能があっても感性の乏しい聴能は無きに等しいと思われるから、音楽は娯楽であっても、大衆音楽であっても、音の羅列でなく、豊かな心を羽づくんでくれるものであってほしい。しかし、学生の音楽的能力が低いために、どのように音楽的知識を認識させ、学生の音楽観を変えるかということに力を注がなければならない。又、音楽教育の現場において学生の好みが音楽教育で経験させようとする音楽の傾向とずれているために、好きでもない、音楽をさせられていると感じさせてしまう現状を改善し、音楽のジャンルを越えた幅広い選択をしていかなければならない。

5 おわりに

以上が、本学学生を対象に実施した調査結果である。この結果をみると、幼少の頃から何らかの音楽教育を受けているにも拘わらず訓練や音楽体験に乏しいために、顕著な成長の過程が見られない。しかし、「その能力がすっかり発揮されるのは25歳から35歳より以後である⁽³⁾」といわれている。このことから現在の調査結果の数値だけを取り上げて問題にし過ぎるのではなく、ひとつの資料として心に留め学生と音楽の結びつきを見守っていききたい。聴能と感受性は車の両輪の如く、聴能だけが備わっていても、逆に感性だけが豊かであっても本当に優れた音楽能力とはいい難い。今日の多種多様な音楽環境の中で、音楽そのものの理解を深め、豊かな心の育成と個性を生かすことを目指し、音楽的な聴能形成につとめたい。

引用文献

- (1) 梅本堯夫著『音楽心理学』誠信書房 昭和56年第6刷 p 482 1行目～2行目, 10行目～11行目
- (2) 同 p 482 3行目～9行目 ウィングの音楽テストを参考に、内容、方法については変更し簡略化した。
- (3) 同 p 450 23行目～24行目

参考文献

- Herbert Wing: 『Tests of Musical Ability and Appreciation』
Herbert Wing: 『Tests of Musical Ability and Appreciation, 2nd.』 Cambridg Uuniv. 1968
梅本堯夫著『音楽心理学』誠信書房 昭和56年第6刷
Atsushi Sakai, Keiko Nakagawa: Analysis of Musical Ability of Music-Students by The Wing Musical Aptitude Test. (Part 2) Sōai Women's Sr. and Jr. College 『Kenkyu Ronshū』 Vol. XXII 1974. 15～16